

平成 22 年度
広島市教育センター

運動を楽しむことができる小学校中学年 体育科の学習指導法に関する研究

—意図的にかかわる場面を取り入れた
ラインサッカーの実践を通して—

広島市立字品小学校教諭

福 永 徹

研究の要約

現代の社会状況に生きる児童たちは、学校外での自然体験・社会体験の不足、日常生活における遊びの減少等により、体力・運動能力の低下が指摘されている。

本研究では、児童が仲間とかかわる場면을言語的行動に絞り、それを活性化できるような場면을意図的に取り入れることとした。そうすることで運動の楽しさを味わうことができれば、体育科の学習時間以外でも自ら運動を行う意識を高めることにつながるのではないかと考えた。

研究授業では、授業の中で意図的に言語的行動が活性化するような工夫をすることで、個々に児童の技能や認知の向上を促進することができたと思われる。また、友達と仲よく学習できたと感じさせることもできたと思われる。今後の課題は、非言語的行動がどのような影響を及ぼしているかを明らかにすることである。

キーワード：言語的行動，体育日記，単元計画の工夫

I 問題の所在

現代の社会状況に生きる児童たちは、学校外での自然体験・社会体験の不足、日常生活における遊びの減少等により、体力・運動能力の低下が指摘されている。

このような状況の中、小学校体育科では、新たに「発達の段階のまとまりを考慮する」「指導内容の体系化」「指導内容の明確化」などがキーワードとして挙げられ、それぞれの運動が有する特性や魅力を生かして基礎的な身体能力や知識を身に付けることを改善の基本方針の一つとしている。

しかしながら、これまでの自身の授業実践を振り返ってみると運動を得意とする児童は日常生活において運動に親しむ時間が多いのに対し運動を苦手とする児童では運動に親しむ機会や時間が少ないことや、運動への意欲が低い児童は、技能差だけでなく、授業場面で友達とうまくかかわれていない状況が多く見られた。これは、教師と子ども、子ども同士のかかわりを質的に高めることができなかったことや、技能を身に付けるに当たって教師の手だてが不十分であったことが原因として考えられる。

そこで、本研究では、教師と子ども、子ども同士のかかわりを質的に高めるという視点から、指導の手だてを工夫し、結果として児童が運動の楽しさを味わうことが、体育科の学習時間以外でも自ら運動を行う意識を高めることにつながるのではないかと考える。

II 研究の目的

小学校中学年体育科の授業において、児童が仲間とかかわる場面を意図的に取り入れてボール運動に取り組む。そうすることで児童が運動の楽しさを味わい、体育科の学習時間以外でも自ら運動を行う意識を高めることができる指導法を探る。

III 研究の方法

- 1 研究主題に関する基礎的研究
- 2 研究授業の計画と実施
- 3 研究授業の分析・考察

IV 研究の内容

1 研究主題に関する基礎的研究

(1) 「運動を楽しむことができる」とは

高田典衛は、児童が運動の楽しさを感じる要因として「動く楽しさ」「集う楽しさ」「伸びる楽しさ」「解る楽しさ」の4つを挙げている。高田典衛は、文部省（当時）体育局体育官、筑波大学、横浜国立大学教授を歴任し、体育科教育の発展に寄与した人物である。

高田によると「動く楽しさ」とは、自ら進んで運動に取り組もうという気持ちになったり、精一杯運動することができたりしたと感ずること、「集う楽しさ」とは、友達と仲よく運動することができたと感じること、「伸びる楽しさ」とは、運動の技能を身に付けた、技能が上達したと感ずること、「解る楽しさ」とは、運動を行う過程で運動の仕方を発見したり、新たに解ったりしたと感ずること、と述べている。

本研究では、前述の4つの楽しさが満たされたとき、児童は運動を楽しむことができた状態であると捉えることとする。なお、児童にとって分かりやすい表現にするため、「動く楽しさ」を「全力で運動する」、「集う楽しさ」を「友達と仲よく学習する」、「伸びる楽しさ」を「運動の技能を身に付ける」、「解る楽しさ」を「運動の仕方が分かる」と置き換えて、聞き取り等の調査を行った。

(2) 「仲間とかかわる場面」とは

本研究では主に、かかわるということ「言語的行動」に絞り、それを活性化できるような場面

を意図的に取り入れることとした。「言語的行動」とは、児童同士の言葉かけ、教師から児童への言葉かけの両方を指している。言葉かけの質によって、児童たちが運動を楽しむことの一助になるのではないかと考えた。仲間とかかわる場面について、以下の2点の工夫を行った。

ア 場づくりについて

本研究では、意図的に仲間とかかわることができる場づくりを設定した。本研究でいう場づくりとは、用具の置き方・コートの設定などの学習環境に関するハード的な面に限らず、教師の言葉かけや児童同士の話し合いの場など、ソフト的な面も含んでいる。場づくりについては、次の3つの場を設定した。

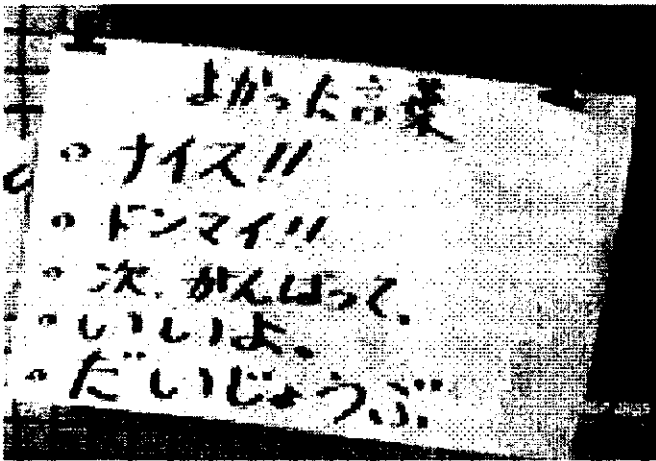


図1 言葉の掲示

1つ目は、「言語的行動」が活性化するための言葉の提示である。図1は、体育日記に記述されていた教師から児童への言葉や、児童から児童への言葉を抽出して掲示したものである。授業の中で直接児童の目に触れるようにすることで、友達に対してどのような言葉かけがよいのかをイメージし、活性化することを期待したものである。

2つ目は、児童の記述した体育日記の紹介である(表1)。友達と教え合ったり励まし合ったりしたことが記述されている体育日記を授業の導入時に紹介することで、学習中にどのような言葉かけをしたらよいのかを考えさせるとともに、児童を肯定的に評価することを意図して行った。

表1 体育日記

<p>し合で、みんなできようよくしてたところと、「<u>がんばれ</u>と言っただけで自分も、<u>ちょっとがんばろう</u>と思いました。</p>
<p>わたしが早くて止められなかったのをOOKんに、「<u>ここで止めたらいよいよ</u>」と言われてやったらうまくできました。</p>

3つ目は、教師から児童に対して賞賛や修正の言葉を積極的にかけるように心がけることである。(図2)児童の活動の様子から、技能面に対してのアドバイス、態度面に対する賞賛の言葉などを可能な限り与えた。教師からの言葉が、児童同士の言葉かけに広がるように意識しながら行った。



図2 教師の言葉かけ

イ 単元計画について

児童たちが言語的行動を活性化させることができるために、時間の確保が必要であると考えた。これまでの自身の授業形態では、1時間の学習の中で「ゲーム-練習-ゲーム」という学習活動を組み込んでいた。この形態であると、児童同士がお互いに言葉をかけ合うことが難しい。なぜなら、それぞれの学習活動の時間が短く、児童同士がお互いに十分言葉をかけ合う前に次の活動に移ったため、言葉をかけ合うことができにくかったのではないかと考える。従って本研究では、児童がより言語的行動を活発化するように単元計画を工夫した(表2)。

表2 単元計画

日付	1/12	1/14	1/19	1/21	1/24	1/26	2/2	2/4	
分	1	2	3	4	5	6	7	8	
5	<ul style="list-style-type: none"> ○ オリエンテーション ・ 学習のねらいを知り、単元の見通しを持つ。 ・ グループ分け(5人×6チーム) ・ 準備運動を行う。(けり出しゲーム、通りぬけゲームなど) 	○ コートの準備・準備運動							
10		<ul style="list-style-type: none"> ○ 思ったところへボールをパスしたり、ドリブルで運んだりできるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲームをして、パワーアップしたいことを見つけよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ チームをパワーアップさせるための工夫をしよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲームをして、もっとパワーアップしたいことを見つけよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ チームをもっとパワーアップさせるための工夫をしよう。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 勝敗を認めながら、まとめのゲームをしよう。 		
15	<ul style="list-style-type: none"> ○ 意欲的に取り組めるようなボール蹴りゲームをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時のめあてを確認する。 ・ ラインサッカーに必要な技能を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時のめあてを確認する。 ・ ラインサッカーに必要な技能を確かめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時のめあてを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時のめあてを確認する。 ○ 前回の学習カードから課題を確認し、練習の仕方を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時のめあてを確認する。 ○ 作戦を決める。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時のめあてを確認する。 ○ 前回の学習カードから課題を確認し、練習の仕方を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時のめあてを確認する。 ○ 作戦を決める。 	
20		<ul style="list-style-type: none"> ○ スキルアップゲームをする。 ・ コートの中でフリードリブル 	<ul style="list-style-type: none"> ○ スキルアップゲームをする。 ・ コートの中でフリードリブル 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲーム①をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 練習①をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲーム①をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 練習①をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲーム①をする。 	
25		<ul style="list-style-type: none"> ・ スピードパスゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> ・ スピードパスゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲーム②をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲーム②をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲーム②をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲーム②をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲーム②をする。 	
30		<ul style="list-style-type: none"> ・ コーン回りドリブル 	<ul style="list-style-type: none"> ・ コーン回りドリブル 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲーム③をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 練習②をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲーム③をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 練習②をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ゲーム③をする。 	
35		<ul style="list-style-type: none"> ・ 的当てゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> ・ オリ抜けけりゲーム 	<ul style="list-style-type: none"> ○ チームの課題を明らかにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ チームの課題を明らかにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ チームの課題を明らかにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ チームの課題を明らかにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ チームの課題を明らかにする。 	
40									
45		○ 本時の振り返り(チーム・個人)をする。							<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時と単元のまとめをする。

具体的には、時間配分の工夫である。表2のように、第1時から第3時は、ラインサッカーのゲームを実施するために必要な基礎的スキルを身に付ける時間を確保した。第4時から第8時は、1時間ごとにゲームと練習を繰り返しながら学習を進める、「ゲーム-練習-ゲーム」の学習活動を取り入れた。この方法は、1時間の学習でゲームを行い、その中でチームの課題を明らかにする。次の1時間の学習では、前時に明らかになった課題を解決するための練習を行う。さらに次の1時間の学習で、前時の課題解決を生かしてゲームを行う。このゲームの中で新たな課題を見つける。このようにゲームと練習を1時間ごとに繰り返す、時間的にゆとりのある単元計画を立てることで、活動のみならず、チームごとに話し合う時間が確保されると考えた。

2 研究授業の計画と実施

広島市立A小学校第3学年を対象に「ラインサッカー」の単元計画を作成し、平成23年1月12日～2月4日に研究授業を行った。

3 研究授業の分析と考察

(1) 分析の方法

ア 授業終了後に児童が記述した体育日記を振り返り所にして、友達や教師からかけてもらったことを一覧表にして分析する。

イ 単元の前半・中盤・単元終了後に行った「4つの楽しさ」の実感に関する聞き取り調査を振り返り所にして、運動の楽しさを感じているかを数値化して分析する。

ウ 授業を撮影したVTRを振り返り所にして、児童の行動やグループ活動の様子、技能の上達度、教師が行った児童への働きかけを映像化して分析する。

(2) 分析・考察

ア 体育日記をもとにした分析と考察

表3はA児の体育日記である。

第6時には、友達から優しい言葉かけがあったにもかかわらず、否定的な言葉かけもあったために、いやな気持ちのまま学習を終えることとなった。しかし第8時には、友達から優しい言葉かけがあり、否定的な言葉はなかったために、うれ

表3 A児の体育日記

第6時	友がドンマイといってもうたのからうれしかったです。でも、もうえがなつてしまふかオオガキだし、 <u>おれと言われたのが、やな気持ちにりました。これからは仲間おれなよこ仲よくなりました。</u>
第7時	ラインマンをうまくつから練習して、 <u>だんぜん上手になってきたのでよかったです。今度もよはんと乱あつて上手になりました。</u>
第8時	今日は <u>前よりは私の人の音ががががしい、おれをだててくれたのでうれしかったです。わたしは相手ボールの派まで、って仲間をぶることを覚えてました。わたしは声かかかひまいてうと思ひます。</u>

表4 児童の言葉かけ

項目	児童の言葉かけ
賞賛的な言葉	ナイス、上手だね、上手になったね、うまいね
修正的な言葉	もうちょっと、止めてゆっくりけろう、足の横でける、くつの横でける、ドリブルは小さくけたほうがいいよ
励ましの言葉	だいじょうぶ、ドンマイ、がんばって、次は勝つてね、いっしょにやろう、チームワークでやろう、負けもいっから、おうえんしてるからね

しかつたと記述しており、意識調査でもうれしい気持ちのまま学習を終えることができた。

また第6時・第7時では、教師が言葉かけをすることができていなかった。そこで第8時には、前時にA児が注目していたラインマンの動きについて、言葉かけるように意識した。すると体育日記の中に、教師からラインマンの動きについて言葉をかけてもらったという記述がなされた。これは特に、児童が注目している部分について教師が察知し、そのことについてアドバイスをしたことが、A児の心の中に大きく残ったのではないかと考える。

運動が苦手であると感じている児童や、友達とかかわりがもちにくい傾向にある児童に対しては、体育日記の記述を参考にしながら、次時の授業の言葉かけを意識して工夫するよう努めた。そうすることにより、教師から励まされたり教えられたりしたことを体育日記に記述する児童が増えた。このことから、児童同士や教師から児童への言葉かけが活性化させることと、先生や友達から言葉をかけてもらうことが新たな発見や、運動の技能を身に付けたと実感することとは、何らかの関連があると考えられる。

表4は、児童が行った言葉かけについて体育日記に記述されていたものを分類したものである。

児童たちが前向きな感情を抱いた言葉は、褒めることに関する賞賛的な言葉、技能に関する修正的な言葉、元気づけることに関する励ましの言葉であるということが分かってきた。賞賛的な言葉・修正的な言葉は、児童が運動の技能を身に付けることや、運動に対する見通しやイメージをもつことに有効であったと考える。これらの言葉は、「もうちょっと」といった抽象的な言葉よりも、「足の横で蹴る」、「ボールを止めてゆっくり蹴る」といった具体的な言葉の方が、児童にとってイメージが湧きやすく、より有効であったと思われる。

イ 聞き取り調査の分析と考察

図3～図6は、第1時と第8時それぞれの授業後に「4つの楽しさ」の実感に関する聞き取り調査をした結果をグラフに表わして比較したものである。

4つのグラフで第1時から第8時を比較すると、すべてのグラフで向上している。児童は、「運動の技術が身に付いた」、「運動の仕方が分かった」、「仲よく学んだ」、「全力で運動した」ことを実感したと考えられる。これらのことから高田典衛の考えに基づき、少なからず児童たちは「運動が楽しい」と感じることはできたのではないかと考えられる。

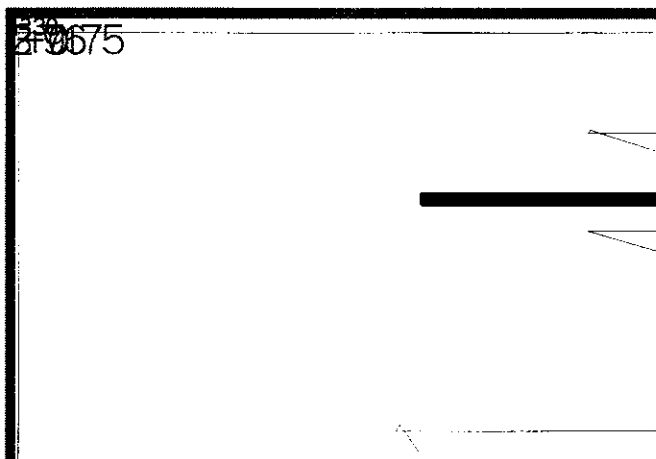


図3 今までできなかったことが
できるようになりましたか。

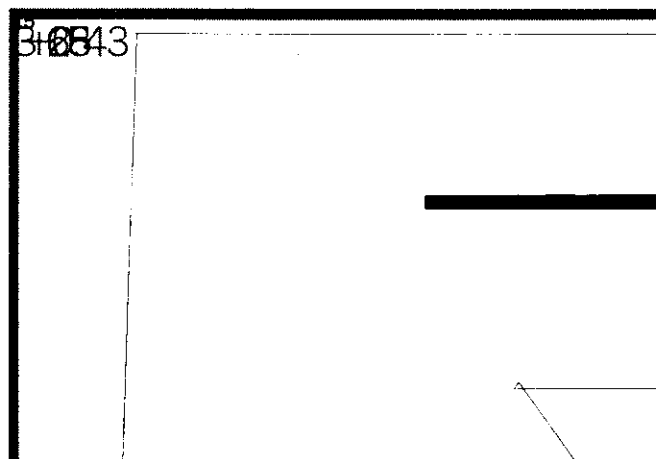


図6 せいっぱい、全力をつくして
運動することができましたか。

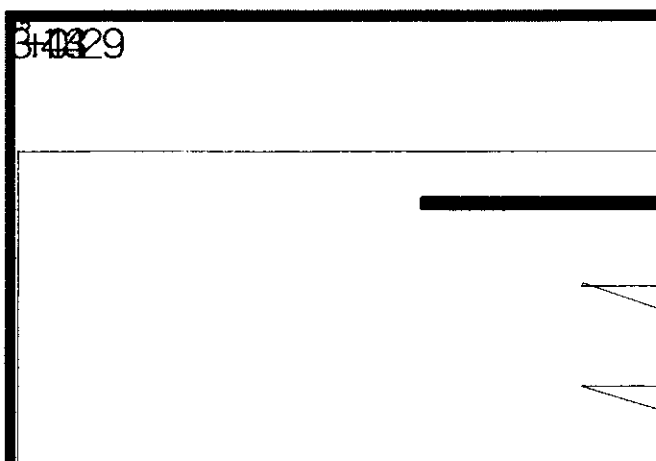


図4 「あっ、わかった」、「あっ、そうか」
と思ったことがありましたか。

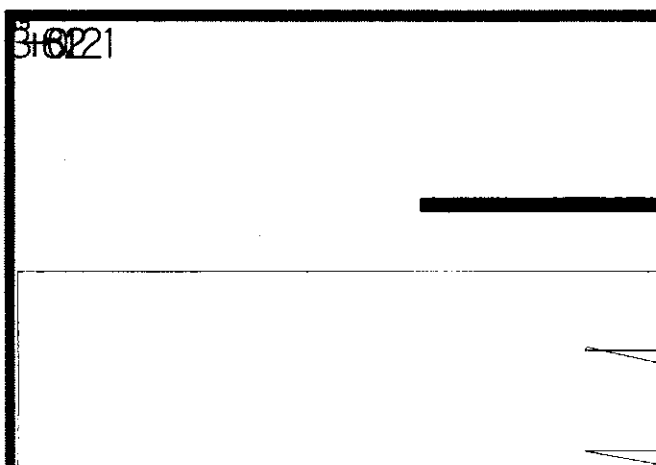


図5 友達ときょうりょくして、
仲よく学習できましたか。

さらに、単元終了時に行った聞き取り調査では「はい」と回答した児童が30人中22人(73パーセント)であった。このことから、児童が運動することを楽しいと感じることができれば、運動に対する関心や意欲を高め、休憩時間・放課後・休みの日といった、体育の学習時間以外にも運動に取り組もうとする姿に変容する児童が増えると考えられる。

ウ VTRの分析と考察

ここでは、児童の行動やグループ活動の様子、教師が行った児童への働きかけが、児童の運動技能の向上や、意欲の高まりにどのように関わっているかを、ボール運動に苦手意識をもっているB児が属するグループの様子をもとに分析する。

B児が所属するグループは男子3名、女子2名のグループで、2名の男子がボール運動を得意としている。

B児は学習開始時、ボールがなかなか思うようにコントロールできず、ドリブルも歩きがら行う状況であった。表5は、B児の体育日記である。

第2時にドリブルができるようになったことを記述しているが、まだ下を向きボールに集中しながらであった。第3時は教師がインサイドキックの個別指導をしたせいか、スキルゲームでうまくできたと実感したことを記述している。

表5 B児の体育日記

第2時	サッカードリブルができました。
第3時	家でボールタッチをやっていたから、ボールが落ちこぼれかくなれたこと、トンネルくぐりでハードルが当たっていませんでした。
第4時	し合でみんなできょうりよしてたところ、「かまはれしよってたらことて自分も、ちょっとかまはれようと思ました。
第5時	さしよ、つば先でけつてもOくんが「くつ左のちまはれしよ」と言われて、けつてみたら、みんなが「くめさんまね」と言われてうれしかった。
第6時	1ばんと2ばんとせんとするときにOくんが「負けしよめさる」と言ってくれました。
第7時	わしがかまはれしよめつたのをOくんは、「ここでかまはれしよ」と言われてやたらまてきました。
第8時	し合前にOくんが「強よか弱よかまててチームワークせさる」と言ってくれたから、まてしよめつたの気持ちもてました。

第4時では友達からの励ましの言葉かけ、第5時では友達からの修正的・賞賛的な言葉かけがあったことを記述していた。どちらの時間も「運動の仕方が分かる」に関する聞き取り調査の評価は4（よくあてはまる）で、ドリブルで足の裏を使い、ボールをパスするときにインサイドキックを意識して使うことができるように変容したと考える。

第7時の課題解決の学習で、このグループは練習方法の選択に意見の食い違いが生じた。ゲーム形式を中心とした解決方法を主張する児童と、それぞれの技能についての解決方法を主張する児童であった。話し合いの時間を延長してグループの課題を再度教師とともに考え、シュートとパスの練習を行うことに決定した。グループのこの判断は、B児の技能のさらなる向上はもとより、グループ全体の技能向上とチームワークを高めることにつながったのではないかと考える。B児の体育日記には、友達からの修正的な言葉かけと、技能の向上を実感した内容を記述されていた。

第8時では、前時の体育日記の内容を生かして、パスされたボールを止め、ドリブルで運び、味方の友達にパスをすることができたB児の姿がVTRに映っていた。単元の学習を通して、ボール運

動を得意としている男子児童1名が中心となってB児に言葉かけを行っていた。

V 研究のまとめ

1 成果

今回の研究を通して、授業の中で意図的に言語的行動が活性化するような工夫をすることで、次のような成果が得られたと考える。

児童同士の前向きな言語的行動が、個々に児童の技能や認知の向上を促進することができたと思われる。また、友達と仲よく学習できたと感じさせることもできたと思われる。

個々に対する言語的行動とは、教師から児童に行わるものが中心である。教師は、前向きな言語的行動でも挙げた言葉のほかに、技能獲得のためのポイントに関する言葉を児童に与えた。このことは、児童がパス・シュート・ドリブルなどの技能を身に付けるために有効であったと考える。

2 課題

今回の研究では、言語的行動についての有効性について分析することができた。しかし、表情、ジェスチャーなどの非言語的行動については分析するまでに至らなかった。

今後は、非言語的行動がどのような影響を及ぼすかについても明らかにしていきたい。

参考文献

- ① 高田典衛『授業研究シリーズ4 よい体育授業の技法』大修館書店、1984年
- ② 高橋健夫『体育授業を観察評価する』明和出版、2003年
- ③ 文部科学省『小学校学習指導解説 体育編』東洋館出版社、2008年